



## ポーランド発祥のアートマイム 木内 ゆか

ポーランドにはステファン・ニジャウコフスキという世界的に有名なマイムアーティストがいます。彼は芸術の分野で長年貢献したため、二度にわたり勲章とメダルを授与されました。そして喜寿を超えた現在でも舞台の上で圧倒的な存在感を放ち続けています。



私は東京で、彼の孫弟子にあたる日本の方(JIDAI)から、このポーランド発の「アートマイム」を習っています。レッスンはまず凝り固まった筋肉を自分で発見し触れることから始まります。五年通っておりますが、長年の習慣で身に付いた心身の癖は頑迷です。私は赤ちゃんやあらゆる生き物に通底する普遍的な「感覚」を取り戻したくて、毎週東横線に乗っているのかもしれない。

先生は五十代の男性です。彼の手は白い木の花のように咲き、軟体動物のように泳ぎ去ります。ネコ科として歩き、オオカミのように遠吠えします。枯れ木として乾燥し、死体として転がることもあり

す。まるでスカーレット・ヨハンソンが主演した映画「LUCY」を観ているかのようです。

ピエロの大道芸がトリックで笑わせてくれるのとは対照的に、このポーランド発のマイムは身体から身体に共鳴させる「詩」と言われています。それは言葉にする前の「感情」であり、延髄で見る「夢」のようでもあります。私たちの身体は太古の記憶を満々と湛える(メモリースティック)で、脊髄では東洋と西洋の海が渾沌と渦巻いているようにも思うのです。

(きうち・ゆか、北海道詩人協会会員、横浜市)

=左写真=ステファン氏主催のマイム公演に招聘されたJIDAI氏(2023.5、ワルシャワ)

\* <https://jidai9.wixsite.com/jidai> / <http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE83-84ArtMime.pdf>



## ポーランドとの出会い 林 祥史



新会員の林祥史です。去年3月に10年ぶりに札幌に帰ってきました。北海道でもポーランドとつながりを持てることにこの上なく喜びを感じます。現在は札幌市内の高校で英語教員をしています。コロナ禍の少し前まで大学院生として北欧フィンランドで研究をしていました。

2008年に愛知の高校から北海道大学に進学しました。ポーランドの方と接する最初の機会は、専門の哲学の研究者や私が大学生活を送った恵迪寮にいた留学生でした。また、寮の後輩がドイツに留学した際お世話になった親友がポーランドの方で、彼の話の影響でポーランドがますます好きになりました。

その他、2年生の春休みにオックスフォード大学とソルボンヌ大学に留学した際も、現地で助けてくれたのはポーランド人の研究者でした。このようにポーランドとはどこに行ってもご縁があり、不思議に思います。

以上のようなご縁のためか、卒業後に3年間の社会人生活を経て海外の大学院への進学を検討した際、ワルシャワ大学の大学院も有力な候補になりました。その時の現地の大学担当者の対応や友人たち

の助けが心を打ち、留学先にはならずとも私の特別な国になりました。進学したヘルシンキ大学院では研究室の同期のお母さんがポーランドの方でした。その同期が突然ポーランド語を話し始めたり、暇があれば古いポーランドの映画を持ってきたりするので、結局ずっとポーランドへの愛着は薄れませんでした。

友人の実家のある田舎町の風景、夜行列車で行ったクラクフの暁、おとぎ話の中に紛れ込んだかのようなウォヴィチのお家——コロナ禍を経た今思うと、幻のような風景でした。

あれほどに素敵な人たちと出会い、夢のような時間を過ごしたポーランドという国は、私にとって一生かけがえのない特別な存在です。帰国した今でも繋がりが持ててこの上なく嬉しいです。(はやし・よしひと)

## シンボルスカとミツキューヴィチ 小池 敏大

「インスピレーションは、特定の詩人や芸術家だけの特権ではない。それは、今までも、今現在も、そして、これからも…いつだって、ある決まった人々の元に訪れるもの。それは、自らの使命を意識的に選択し、自らの仕事に愛を注ぎ、想像力を働かせる人の元にこそ訪れるもの」(ノーベル賞講演)



これはポーランドの詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカの言葉です(英語版より)。この言葉との出逢いは、私がシンボルスカの詩の世界に初めて触れた瞬間でした。この言葉は、私がポーランドという国、その文化を知っていく中でますます熱を帯びています。

それを強く感じたのが、2019年に東京で上演された創造演劇『祖霊祭 DZIADY』(ジヤディ)を観劇した時でした。アダム・ミツキューヴィチの作品に着

想を受け、ポーランドと日本に共通する先祖供養をテーマにしたこの作品は「過去とどう向き合うか」という視点を投げかけてくるように感じ、実際、日本の沖縄とポーランドのワルシャワで見た光景を私の脳裏に強くよみがえらせてくれました。

ご縁を戴き入会させていただきました。今後、皆さまとますます交流を深めさせて頂きましたら幸いです。

(こいけ・としひろ、岐阜県高山市)

※以下は、2019年の日本とポーランドの国交樹立100周年に際して寄稿したエッセイの一部です。

## 演劇『祖霊祭 DZIADY』に学ぶ 小池 敏大

日本とポーランドには、古くから伝わる、互いに似通った慣習がある。その一つが「祖霊祭」と呼ばれるものだ。

日本では「お盆」がその一例で、年に一度、8月の中旬に、先祖や亡くなった方々の霊魂たちが浄土(仏教の用語で、死者の住む死後の世界)からこの世に戻るのを迎え入れ供養する行事である。私たちはお盆の時期に生まれ故郷に帰省し、家族や親戚と再会し共に先祖の墓を訪れる。いわゆる「墓参り」の慣習だ。墓に行くと、苔や草をむしったり、冷水を掛けて墓を磨いたりして、綺麗に墓を清掃する。そして家族や親戚が揃って先祖の墓に線香を上げ、先祖達に日々の生活の安寧を感謝し、彼らの魂の安らぎを祈念する。また、お盆に入る時期に地域や家族で「迎え火」を焚き、先祖達の霊を迎え入れることもある。この他、盆提灯を灯したり、長崎では先祖の墓前で打ち上げ花火を上げて、盛大に先祖をお迎えするという慣習も行われている。

一方、ポーランドには毎年11月に“Dziady”と呼ばれる先祖供養の日があり、一家で先祖の墓を訪れ、



墓を清掃しキャンドルや花を手向け、また食事や飲み物を先祖達に供え、彼らの霊魂を迎え供養するという行事がある。

“Dziady”はポーランドに古くから伝わる土着の死者の霊魂を供養する伝統的慣習で、後にポーランド全土に広がったキリスト教文化よりも早く、深く人々の心に根付いているといわれる。〈…〉

私が“祖霊祭”を知ったのは、創造演劇『祖霊祭 DZIADY』との出会いがきっかけだった。ポーランドの国民的詩人アダム・ミツキューヴィチ作『Dziady』をもとに、“先祖を迎え先祖の霊魂たちを供養する”というポーランドと日本の共有する慣習をテーマに、一つの

演劇舞台の上でポーランドと日本の“先祖供養の祭典”を融合させ、二つの国の霊魂たちを舞台に迎え入れ共に供養するという作品である。

私は2019年5月、東京・浅草の浄土真宗の寺院・西徳寺で、日本・ポーランド共同創造演劇『DZIADY 祖霊祭』を鑑賞し、両国の過去との向き合い方を学んだ。寺院という死者たちの霊魂を供養する空間を舞台に、僧侶たちの読経が始まり、全員による読経が、時々一人に変わったり、また数人に変わったり、さらに僧侶たち全員による読経に戻ったりと、まるで轆轤を廻しながら、こねた土を大きく広げたり、小さく萎めたりして器を創りあげてゆくように、僧侶たちの経を読む声が膨らんだり、萎んだり抑揚を繰り返しながら、寺院の中に不思議な空間を創り上げていった……

長い黒髪の全身黒づくめの衣装の、異教の儀式を司る祭司の魔術師の男性と、日本の浴衣姿の、猫の面を着けた女性が舞台に現れ、輪舞曲(ロンド)のようなポーランドの民族音楽と思われる曲に合わせて、一組になって踊り始めた。曲に合わせて、明るい歌声が入ったり、その歌声が何かに取り憑かれたような、狂気じみた叫びに変わったりして、殺伐とした空気に舞台一帯が包まれた。

場面は変わり、日本の音楽(東京音頭)が流れ、浴衣姿の狐やひよつとこの面を着けた死後の世界から来た祖霊たちが音頭に合わせて踊り始める。日本の盆踊りの光景だ。彼らはある時は人間の声を出して踊ったり、またある時は鳥や猫といった動物の鳴き声を出して音頭に合わせて踊ったりした。〈…〉

(初出「日本・ポーランド  
国交樹立100周年記念  
エッセイコンテスト入賞  
作品集」2020/1/31\*)

=写真=©Maciej Zakrzewski

